

『東方』二七五号より

紙上の書院博物館

鶴成久章（福岡教育大学）

中国の書院に関する研究と関連資料の整理・蒐集とを精力的に進めている湖南大学の嶽麓書院文化研究所（注）の研究者が、一九九六年からおよそ六年の歳月をかけて編集した書院図録が一昨年一二月に上梓された。本編全二二八頁に、中国各地の八〇余箇所の書院を实地調査して撮影したという約三八〇葉の写真が最新の研究に基づく解説とともに紹介されている。嶽麓書院文化研究所は、中国における書院研究の中心であり、本書の「序」「後記」によると、近年は政府承認のもと、研究所のスタッフの手で、国内唯一の中国書院博物館の開設が鋭意進められているとのことである。李学勤氏が「序」の中で、いみじくも本書のことを「紙上の書院博物館」と云つてい、本書はこれまでに嶽麓書院文化研究所が積み上げてきた書院研究の重厚な蓄積と周到な資料蒐集の所産であり、美しい写真と簡明な解説により中国書院文化の様々な方面にわたって読者の理解を深めさせてくれる大冊である。

本書の内容構成は次の通りである。

序

第一部 概論

第二部 学府勝地（優美環境／嚴謹布局／独特造型／郁郁文気）

第三部 斯文聖境（書院種種／学制概覧／學術綿綿／祭烟裊裊／書香飄溢）

朱漢民・鄧洪波・陳和主編

『中国書院』

二〇〇二年・上海教育出版社・二〇、〇〇〇円

第四部 名院巡礼（嶽麓書院／白鹿洞書院／嵩陽書院／

東林書院／鵝湖書院／東坡書院／五峰書院／蓮池書院）

第五部 結束語

附録：本書所収書院名録／主要参考文献／中国書院分布

図

後記

なお、本書には別冊の英文稿「Chinese Academies」（全四八頁）が附録されており、そちらにはニューヨーク市立大学の李弘祺氏の解説と本編の図版の英訳が収録されている。

「後記」の説明によると、本書の骨子は鄧洪波氏の手に係るものであり、それを編集委員会で議論して練り上げたという。各部分の執筆は、第一部と第五部を宋明理学研究の専門家として著名な研究所長の朱漢民氏、第二部を書院建築研究を専門とする楊慎初氏、そして第三部と第四部並びに附録の書院名録を鄧氏が担当したという。ちなみに、本書との関連で補足すれば、近年、楊氏は、『中国建築芸術全集（一〇）書院建築』（中国建築工業出版社、二〇〇一年）の解説と『中国建築文化叢書 中国書院文化与建築』（湖北教育出版社、二〇〇二年）を執筆しており、また鄧氏は、湖南大学出版社の「中国書院文化叢書」「中国書院楹聯」（一九九九年）、同じく『中国書院学規』『中国書院

章程』『中国書院攬勝』（二〇〇〇年）、『中国書院詩詞』（二〇〇二年）を編著者として出版している。

それでは、以下に本書の内容を簡単に紹介してみたい。

まず、第一部「概論」では、唐代における書院の起源から説き起こし、宋、元、明を経て、清朝光緒二十七年（一九〇一）の「改書院為学堂上諭」によって中国の書院制度が一応の終息に至るまでを、関連の写真・図版を示しながら概説し、中国の書院が中華民族の教育文化の歴史に果たしてきた役割とその意義を説明している。

第二部「学府勝地」では、書院の建築環境と建築物の特徴とが解説されている。書院が建てられる環境としては、山水の美しい景勝地や郊外の風景優美な場所が選ばれ、その土地の自然条件や地勢を十分に生かし、「地に因りて宜を制」することで、自然と人文の景観を有機的に結合しているという。また、書院建築は他の中国の伝統建築と同様、配置の上で中軸対称で縦に多数の建築物が並ぶ院落形式を採用しているが、書院建築にはその三大事業（講学、藏書、祭祀）を行うのに適応する配慮も見られるという。さらに、書院建築は、中国の伝統建築文化の中で、官式の建築文化や民間の建築文化とは異なるいわば一種の文人建築であり、それは儒家の「礼楽相承」の精神を追求しつつ、「善美同意」の思想を反映させたものであるという。以上のような解説に関連する写真・図版として、堪輿家が最も吉とする環境に建てられているという湖南醴陵の淶江書院をはじめとする独特の自然環境や園林に恵まれた書院、それに、建築物が緻密に構成配置された書院や特徴のある造型を有する書院が多数紹介されているほか、飾り窓や柱、屋根等に独自の意匠をこらした書院建築も紹介されている。また、楊氏は書院の齋堂樓閣の題額や碑刻も書院建築美術

トップページにもどる

中の重要な要素であると言い、鵝湖書院の四柱五樓の牌樓や嶽麓書院の扁額、碑廊など、書院の歴史と共に年輪を刻んできた文物とそれらが醸し出す風格についても言及している。

第三部の「斯文聖境」では、鄧氏が先に『中国書院制度研究』（浙江教育出版社、一九九七）で提示した分類に基づいて、多様な書院類型とその機能についてまず概説し、その上で書院の三大機能である講学、藏書、祭祀について、教育史、思想史、文化史の各方面にわたりながら解説している。そこでは、まず書院の学術活動の中心である講学活動を取り上げ、張軾、朱熹、王守仁等の例を論じつつ、講学によって培われた学的精神が中国思想を主導する学者を書院から輩出させたと言う。ついで、祭祀については、北宋に始まった書院の祭祀が、書院の学術活動と教育活動に深く関わる極めて重要な要素であり、書院制度の発展とともに書院祭祀は一層重視されてゆき、祭祀の対象範囲も不断に拡大していったと説明する。そして、書院がその誕生当初から有していた機能である藏書については、書院の藏書は、官府の藏書、寺觀の藏書、私人の藏書とは目的が異なり、師生の教学と学術に奉仕するためのもので、公共性、公開性、実用性とその三大特徴であったと主張する。また、鄧氏は、藏書のみならず書院における刻書も、中国の出版史上に燦然と輝く事業であったと述べ、宋の石鼓書院の『石鼓論語問答』、清の鰲峰書院の『正誼堂全書』、学海堂の『皇清經解』等の例を挙げる。そして、その伝統が、清朝末期の広雅書局をはじめ、各地で書院が開設した書局へと展開していったことが解説されている。

関連する写真としては、多様な書院の例として、一族の教学と祭祀を担った山西の晋溪書院（家族書院）、郷村の

人々の教学の地として地域の製糸業の収入で運用された浙江の立志書院（郷村書院）、県内の子弟の教学の目的で知県が運営に関与した河南の大程書院（官立県級書院）、その他商人が同郷の誼を深めたりした湖北の金陵書院（商籍書院）、少数民族の子弟の教育に資した広西の絳正書院（少数民族書院）ほかを紹介されている。

講学や教学活動に関わる資料としては、「白鹿洞書院揭示」の石刻や独自の教法で知られる宋の胡瑗を祀る泰州の安定書院と「明体達用」の扁額、各地の書院の講堂が紹介されているほか、書院と科挙との関係を示す資料の写真もある。そして、福建における朱熹の講学に関わる書院・史蹟やその墓所、王守仁の学問に縁の深い陽明洞や龍崗書院、それに浙東学派の甬上証人書院などが紹介されている。ついで、祭祀関係では、白鷺洲書院の雲章閣の祭壇、杭州の紫陽書院跡から出土した石香炉、台湾の道東書院の朱熹の神位など。そして、蔵書関係では、代表的な蔵書楼として嶽麓書院御書楼、嵩陽書院の蔵書楼とその蔵書、湖南の箴言書院の蔵書印など。さらに、刻書関係では、元代の南山書院、鄞江書院で出版された書院本、書院生の教育目的で印刷された清代の「課藝」など。その他、「貴生書院官田」の石標や五老峰下の白鹿洞書院の学田の写真といった興味深いものもある。

第四部「名院巡礼」では、全部で八箇所の名書院が建築物や関連の文物の写真によって詳しく紹介されている。ここでは、いわゆる「四大書院」のうちで現存する嶽麓書院、白鹿洞書院、嵩陽書院がまず取り上げられる。そして、明末の東林学派の拠点として著名な無錫の東林書院、「鵝湖の会」を記念して建てられた江西鉛山の鵝湖書院、海南の儋州に左遷された蘇軾を記念して建てられた東坡書院、朱

▶ トップページにもどる

◀ 今月の『東方』

◀ 書評目次へ

熹、呂祖謙、陳亮らの講学の故地とされる浙江永康の方岩寿山の麓に建てられた五峰書院、そして河北の保定に雍正十一年（一七三三）に詔令で建てられた省級書院の蓮池書院、以上の書院が「巡礼」の対象である。

第五部「結束語」においては、毛沢東や胡適の言葉を引用しつつ、中国の伝統的な書院制度の意義を改めて強調する。末尾の「人間が存在する以上、必ず文化と教育があり、文化と教育がある以上、中国書院の文化的生命と教育の伝統は決してゆるがせにされることはない。」という言葉には、編者らの中国の書院文化に対する熱い思いが溢れている。

唐代以降中国で開かれた書院の総数は約七三〇〇であり、しかも時代や地域ごとに極めて多彩な顔と機能を持っており、その全体像を伝えるのはなかなか容易ではない。編者らの苦心が偲ばれる所以である。ともあれ、本書は、読者を居ながらにして郁郁たる中国書院文化の世界に游ばせてくれる「紙上の書院博物館」であると言える。

【注】その一端については、本誌二二八号「中国で進む書院研究資料の整備」において、ごく簡単ながら紹介させて頂いた。なお、その際に失礼にも鄧洪波氏の姓を鄭と誤記してしまった。この場を借りて訂正させて頂くとともに、鄧氏には謹んでお詫び申し上げたい。